



中北の地域社会 (COM munity)の心の交流 (COM munication)をめざします

読書の夏 図書館へ

甲府市立富竹中学校・すたまお話の会 アリス

子どもの読書活動優秀実践校・団体として、甲府市立富竹中学校（菅谷信校長）と、北杜市の「すたまお話の会アリス」（内藤英子代表）が、文部科学大臣表彰を受けました。それぞれの活動をご紹介します。

【甲府市立富竹中学校】

朝の会が始まるまでの静かな時間。富竹中学校では長年朝読書に取り組み、生徒は落ち着いた一日の始まりをむかえられるようになりました。学級文庫にある本は図書委員が毎月選書します。最初はどの本を選んでいいかわからなかった生徒も、数か月後には、選書の力を発揮しています。調べ学習での図書館の活用も多く、生徒が作成した本のポップにつられて、思わず本を手にしてしまいます。



分散登校やオンライン授業の時期は、家で過ごす時間が増えたことで本の貸し出し数も増えました。

——本の魅力とは。

昨今、人とのつながりが希薄になってきてしまったように感じています。本との出会いで、世界を広げ深めてほしいです。（菅谷信校長）

本との出会いは人生の豊かさにつながります。ピンチの乗り越え方を教えてくれることもあります。（司書 輿石抄穂里先生）

——図書委員も積極的に活動しているそうですね。

秋の読書週間にはスタンプラリーや読書パズルなど企画しました。図書館へ友達を誘う作戦も。今年の秋には、マスの中を本のジャンルにして読書ビンゴに挑戦しようかと。いろいろなジャンルの本を読んでほしいですからね。（輿石先生）

新しい世界に出会い、大きく成長する富竹中学校の生徒の姿が目につく秋になりそうです。

【すたまお話の会 アリス】

6月1日(水)、すたま森の図書館内「森のおはなし劇場」には、おはなし会を待ちわびる5組の親子が。手遊び歌が始まると、歌に合わせて体いっぱい使って表現する子どもたち。図書館職員の方とともに、紙芝居、絵本の読み聞かせが続きます。お母さんたちも笑顔で楽しんでいました。

——読み聞かせに引き込まれました。

お話し会では、その日の雰囲気をつかんで様々な声色を使います。子どもたちもだんだんと聞き上手になってくるんです。最近、パパや外国の方も来てくれて、地域交流の場にもなっています。

——いつ頃から活動しているのでしょうか。

気がつけば22年目です。14名の会員の中には設立当初からの会員もいます。一人ひとりができることを担当し、認め

合いながら活動しています。

——すたま森の図書館を中心に活動していますね。

初代図書館長さんの頃、読み聞かせや朗読、ペープサートなどを学ぶ講座に参加しました。また、脚本、図案、色塗りなど、会員の得意分野を活かして、須玉の全6地区に伝わる昔話を大型紙芝居として完成しました。8月6日(土)はスペシャルなイベントがありますので、みんなで夏休みの特別な1日にしましょう。

地域の図書館を文化発祥の場所にと、会員の皆さんの学びあう姿に、地域への強い思いを感じました。



「読書センター・学習・情報センター」の機能を持つ図書館ですが、固定化された人間関係から離れ、年齢の異なる人と関わるなど「心の居場所」となっていることもあります。幼児期から家庭や地域社会の支援を受けて、学校での教科の枠をこえて本に親しむことができる場所です。

小笠原氏発祥の地、南アルプス市。市内の小・中学校では、平成25年度から「小笠原流礼法」を取り入れた心の教育推進事業を推進しています。白根御勅使中学校（岡こずえ校長）でも、1年生を対象に講座が開かれました。

「小学校の時のことを復習しながら・・・。」との講師の声かけに、ずっと背筋を伸ばす生徒。小学校1年生の時から少しずつ礼法指導を受けていることもあり、講師の一言一言を理解して、すぐに姿勢を整えます。説明を聞く生徒の姿勢が崩れないことも驚きです。

「挨拶やマナーは、お互いに気持ちよく過ごすために大事です。大きな声の挨拶はやる気も出ます。生徒と一緒に学んでいます。」（河西智之教諭）

「相手を大切に思う心が根底にあります。なぜ、そのような所作になるのかを考えて納得すると、相手に敬意を表す振る舞いにつながります。学んだことを意識して、日常生活の中で自然と所作ができるといいですね。」（講師の先生）

「なかなか普段できていないけれど、学んだことを意識してやっていきたい。」「相手の立場を考えて挨拶や礼をしたい。」（1年生生徒）

今後も「こころ」を「かたち」に表したものとして、「折形」や「紐結び」、もてなしの心得などを学ぶ予定です。例年、夏には、新たに市内に赴任した先生方を対象に、小笠原流礼法の研修があるとのこと。「今年は私も参加します。」と、大間俊男教頭が話していました。

取材で白根御勅使中学校を訪れた際、来校した方に、複数の生徒が、廊下で立ち止まり大きな声で挨拶をしていました。きっと、市内の他の学校でも、自然に行動する小中学生の姿が見られることでしょう。



（写真は昨年度の様子）

#中北バトン

様々な立場から、子どもたちへの思い、地域への思いを語っていただきます。

「信玄堤」

令和4年度中北地区地域教育推進連絡協議会会長

甲斐市教育委員会教育長 横森 貴志

「甲斐市」は、住宅地と農地が混在する利便性の高い市街化地域と、昇仙峡などの景勝地を有する森林資源や自然景観のある緑豊かな地域があり、充実した環境の中で「甲斐市で育ち、甲斐市を育てる人づくり」を基本理念とした創甲斐教育を推進しています。

その「甲斐市」には、武田信玄公が度重なる釜無川の氾濫を鎮めるために築いたといわれる信玄堤があり、四百数十年の歴史を経て今なお雄々しい姿をとどめています。甲斐の先人たちが決してあきらめることなく自然に抗い続け、やがて信玄堤を築いて釜無川の氾濫を鎮めることに成功したように、子どもたちには、知恵と勇気と努力、そして思いやりの心を持ち続けてほしいと思います。そして、何かひとつでも自信をもって取り組めるものを見つけ、夢や目標をもって今を生き抜いていってほしいと願っています。

現在、少しずつ修学旅行などの学校行事が元の形を取り戻しつつありますが、制限された生活はもうしばらく続くものと思われます。このような時こそ、子どもたちを育む環境である家庭・学校・地域社会が手をつなぎ連携を深め、未来を生きる子どもたちが幅広い分野で活躍できる人材となるよう、一体となって教育に取り組むことが大切だと思います。

教育委員会としても、誰もが平等に受けられる教育環境の充実、GIGAスクール構想などICTを活用した新しい学習に対応した基盤整備、また、学校における働き方改革としての業務適正化など、新たな時代の教育に沿った質の高い教育環境づくりに取組んで参ります。そして、甲斐市で学び育つ子どもたちが心身ともに成長し、甲斐市を「ふるさと」として育てていくことを心から願っています。

6月30日（木）敷島総合文化会館において、第1回中北地区地域教育推進連絡協議会（会長 横森貴志 甲斐市教育委員会教育長）の研修会が行われました。今回は3つの研修会を企画、後半は選択参加できるようにしました。内容を一部紹介します。

○研修会1「ヤングケアラーの子どもたち～その対応を中心に～」

山梨県総合教育センター 相談支援センター 統括SSW 依田 勝芳 氏

ヤングケアラーとは、一般に本来大人がになうと想定されている家事や家族の世話を日常的に行っている子どもとされている。

ソーシャルワークでは、個人と環境の不適合を解決するためにより多様な方法から、個人のエンパワーメントや環境の改善を目指す。スクールソーシャルワーカーは、内的リソース（興味・関心、これまでうまくいったこと、「解決策は本人が持っている」と外的リソース（支援担当、SSW、学校など）を明らかにし、子ども、家族、学校、地域社会を有機的につなげる働きをしている。

ヤングケアラー専用の支援方法があるわけでない。本人だけでなく、家族全体への支援、きめ細かな社会福祉制度・サービスの整備など、包摂的社会を実現できる社会体制の確立が求められる。

キーワードはスティグマ（差別・偏見）。スティグマは対象とされた人物や集団において自己の尊厳の低下を引き起こす。そのため、正しい理解と多方面の市民社会からの参加と協力が必要。

相手とつながるということは、相手に寄り添う（付き合う）ということが大切である。



◇参加者の感想

「単にお手伝いしているのではなく、そのことによって、本来ならできることができない状況が問題であることをきちんと知ることが大切だと感じた。」

「保護者の思い、子どもたちの実態をよく見て聞いて（傾聴の姿勢）寄り添う言葉かけ、支援がとても大切だと思いました。」

「いつでも相談できる環境を整え、『自分は1人ではない』という安心感を持てる社会づくりが最も大切だと思いました。」

「関係機関と連携し、必要なニーズをその都度検討し支援する必要があると改めて感じました。」

「スティグマ（偏見・差別）は、注意しないと誰でも無意識に他人を苦しめることがある。多くの人に知ってもらいたいと思いました。」

「『目の前にいる人がクライアント』『解決してあげようと思わないこと』など心に、生徒や保護者に寄り添っていきたいと思います。」

○研修会2「心を育てる バレー日本一と地域の力」

日本航空高等学校 バレーボール部監督 月岡 裕二 氏



インターハイ県予選を新型コロナウイルス感染症で出場辞退したつらい思いを乗り越え、バレーボール全日本選手権（春高バレー）でつかみ取った日本一までの道のりや、これまでの指導で大切にしてきた「バレーを 一（いち）にするモットー」の意味、日頃から選手とコミュニケーションをとることの大切さや生徒に対する熱い思いを語っていただきました。

会場にいた月岡先生の教え子や、中学校でバレーを指導し、長きにわたり月岡先生と山梨県のバレー強化に携わってきた先生方も対談に参加し、講演も熱く盛り上がりました。バレーボール・スポーツを通じて、子どもたちの心を育てることの大切さや指導の心得など、多くのことを学ぶことができました。日本一の監督でありながら、月岡先生の飾り気のないお人柄、経験からにじみ出る言葉の重みを、直に感じ取れた有意義な時間でした。対談形式の講演も好評でした。

◇参加者の感想

「チェンジ→チャージ→チャレンジの考え方（指導方針）感銘を受けました。」

「凡事徹底、日常生活をしっかりすること、子どもたちの心を育てることの意味が伝わってきました。」

「目標に向かうための心を育てていくことを第一に、子どもたちを育てたいと思いました。」

「部活動だけでなく、学級経営でも使えるキーワードや意識のさせ方などとても参考になりました。」

「生徒に夢を与える指導者になってほしいという言葉。これからの教育活動に活かしていきたいです。」

「心を育てることの大切さは、教育現場のあらゆる場面で必要なスタンスであると再認識できた。」

(続き)

○研修会3「幼児教育の今日的課題」

山梨県教育庁義務教育課 主幹・指導主事 山下春美 氏

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が平成30年度から、小学校学習指導要領が令和2年度から全面実施となった。

3月31日まで園児だった子どもが、翌日4月1日には小学校1年生になる。「小1プロブレム」という言葉もあるが、どの子にとっても、期待と不安が入り交じる、大きな環境変化である。幼児期の学びと小学校の学びの違いを理解して、幼保小の先生方が共感しながら協議できるような工夫が求められる。

現在、育ちと学びをつなぐ架け橋期のカリキュラムの実施に向けた取り組みがすすめられている。5歳～小1の2年間で「架け橋期」と位置づけ、全ての子どもに学びや生活の基盤を保障するねらいがある。お互いの要領や指針を読んでみる。幼保の先生が小学校の授業を見る、小学校の先生が幼保の授業を見るといった、育ちを語り合う機会を持ち、子どもの関わり方を家庭や地域にも普及できるように、幼保小の円滑な接続ができるよう一緒に取り組みましょう。



◇参加者の感想

「園でも話題になっています。『架け橋期』の大切さ、保幼小でつながることの重要性を再確認できました。」

「子育ての悩みのある時期でもあるので、保護者も学習する機会があればと思います。」

「地域の小学校と園とで、話し合いの機会を設定したいのですが、実現できますか。」

「幼保小連携・接続の重要性は、将来の大人の姿であると知り、5歳から小2までの教育の働きかけの大切さがよくわかりました。」

社会教育委員1年生として

中北地区社会教育委員研修会

新たに社会教育委員に任命された方を対象に、社会教育委員研修会が北巨摩合同庁舎で行われました。山梨県教育庁生涯学習課の社会教育担当の伊藤宏紀氏、社会教育主事の川井さや加氏を講師に迎え、社会教育委員の役割について、わかりやすくご説明いただきました。

この研修会は、昨年度市町の社会教育担当者から要望があり、今年度新規に企画した研修会です。初めて社会教育委員になった方が、どのような視点で地域や人のつながりをつくっていくか、全国各地の実践事例を参考に学びました。途中、課題や悩みなどを意見交換する場面もあり、市町を越えた交流の時間となりました。



〈参加者の声〉

○地域の問題について解決のヒントがもらえた気がしました。

○社会教育委員になり、どんな役割なのか、どんな活動をするのか、不安なままで研修会に参加しています。まだまだ理解できないことが多く悩みます。地域や町のために、役立つ活動ができればと思っています。さらに、学びながら動き出せばと思っています。

○他の市町の委員さんと話し合うことができ大変参考になりました。



山梨の子ども姿をみつめて

『2022山梨の子ども白書』をご存じですか？

山梨県内の子どもの教育や居場所づくりに取り組む個人や団体による、子どもたちの状況やそれぞれの活動報告が掲載されています。特集は「コロナ禍の子どもたち」山梨県立大学の金碩浩先生と学生との誌面座談会などです。

<連絡先> 山梨の子ども白書編集委員会事務局
e-mail ymns.kdm@gmail.com